

TOKYO美人と、東京100ストーリー

心は翼 連載⑤

(013 旧古河庭園)

穂高健一

夕日が沈んだ都内に入った。桜が咲いた石神井川に沿っていく。そのさきにある大学のグラウンドでは、学生たちがランニングする光景があった。

井伊はその管理棟の窓口で、フィールドで、ストッップウォッチを持つコーチが芝浦達也だと、おそわった。

長身の達也はスポーツ刈りで、角ばった顔だった。400メートルを一周してくる学生たちのタイムを計っていた。

「こういうものだが」

井伊は、名まえだけの名刺を差し向けた。

「どんな用件でしょ？」



「鳴野佐和子さんについて、お話がしたい。すこし時間をもらえないかな」

「いま、タイムトライアルをやっていますので」

それは口実で、彼女の話題を嫌った態度に思えた。

「それなら、用件は切りつめよう。彼女の電話番号か、メールアドレスか、いずれかをおしえてもらいたい」

「どういう関係ですか？」

達也の顔には怪訝な表情がうかんだ。男子学生が通過していく。あと2秒、タイムを上げろ、と叫ぶ。その視線がもどつてきた。

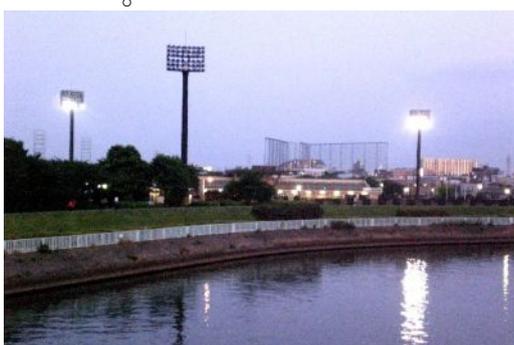
「通称、池袋の裏稼業人。彼女から、ある事件の解決を依頼された。急いで彼女と連絡を取りたいんだ」

「それがどんな事件か、ボクにはわかりませんが、依頼主の住所や電話番号を知らないなんて、それは不自然じゃないですか」

「いい勘だといいたいが、不自然だからこそ、彼女の生命にかかわる状況が予測されるんだ」

「電話もメールアドレスもおしえられませんか」

男子ランナーが目のまえを駆け抜けていく。達也は声を張り上



げ、タイムをおしえる。

「いまのことばから判断すれば、彼女のメールアドレスも、電話番号もパソコンから消去されていない。記憶からも消えていない。つまり、あんたならば、嶋野佐和子さんに連絡がつけられる、ということだ」

達也が無視した態度をとった。

「彼女に、おれのケイタイ番号をおしえて、早急に連絡をつけてほしい、と伝えてくれないか」

「お断りします。彼女との交際はもう終わりました。電話などかける気もありません。最後は不愉快なメールでしたから」

息切れるランナーには、もつと手を振れ、もつと足を上げろ、と叫ぶ。

「彼女が殺されてもいいのか」

「また、悪魔ですか」

「そうだ。悪魔にいのちを狙われている」

「悪魔なんて、ウンザリです。去年の秋、ボクは渋谷の道玄坂で、暴漢に包丁で刺されました。喧嘩仲間とまちがえられたのに、佐和子は悪魔がうしろで手を回したからだという。『私と交際している、と、また、あなたは悪魔に狙われます。わたしの心には、もう愛の翼などないのです』という内容のメールがきた。悪魔なんて、ファンタジーな世界だ。ボクには理解できない女だ」とつくづ



く思った。だから、ボクはそれを最後にした」

「それだけの理由がある」

「ボクにはもう関係ない、悪魔の話にはついていけない。あなたの話を含めて」

達也の視線はどこまでも学生にあった。

「わかった。あんたは嶋野佐和子が生きようが、死のうが関係ないわけだ。この先、事件に巻き込まれて、彼女のいのちが絶たれても、もはや関係ない女だ。葬儀にも参列しない」

「ボクはそこまで言っていないでしょ。ファンタジーな世界は理解できない、といったままでです。葬儀の話までしていません」

「彼女はいまもって、芝浦達也を愛してやまない。彼女には気の毒だが、もうあの男はあきらめな、あなたを想う気持ちなどまったくない、と伝えておく」

「悪魔なんて、この世にいるとは思えない」

「悪魔がこの世にいないだって、ファンタジーだって。悪魔とは非道で、冷酷な人間を指すことばだ。いいか、嶋野佐和子は5歳のときに、冷酷無比な犯人に誘拐され、酷寒の八ヶ岳の雪稜に2週間も軟禁されているんだぞ」

「えつ。それは知らなかった」

「極悪な犯人を悪魔と呼ばず、なんと呼ぶ。彼女を恐怖のどん底に突き落とした犯人は、お釈迦さまか？」

井伊が語気を強めていった。

「何で、そんな事実があったと、ボク話してくれなかった……」

「いいか。彼女にとって死ぬ思いをした2週間だ。それから犯人の影に脅え、トラウマに苦しむ日々となった。それでも21年間、死を選ばず、詩を書きながら生きてきた。やがて、一人の男を愛した。心には赤いバラが咲きはじめた。それは可憐な心優しい花だ。しかし、恋人が道玄坂で刺された。この瞬間、彼女は凶器の肉きり包丁から、21年前の悪魔の影をみたのだ。このさきも恋人が、おなじような事件に巻き添えになることを怖れた。彼女は悩んで、苦しんで、考えた末に、別れのメールを送った。おれから言わせれば、あんたはそれを真に受けた、バカとしかいいようのない男だ」



達也が無言で、唇をかみしめた。その目はなおもランナーを見ている。

「悪魔ということばの背後には、何があるのか。そこまで踏み込みもせず、彼女の痛む心の傷すら見抜けず、本意でないメールを鵜呑みにする男だ。しよせん、そのていどの男よ」

井伊はグラウンド出入口の管理棟にむかった。井伊の脳裏には、佐和子のことばがよみがえっていた。

『別れてみると、ことばで言い表せないほどの、ショックでした。私にはもう愛の翼がない。雪山で死ぬのが一番。6歳の時に死んでいてもおかしくなかった山岳で死にたい。でも、凍死できる雪

稜に登るには、体力はないし……。そんな悶々とした日々がつづいていました』

達也が追いかけてきた。

「誘拐事件はほんとうですか。一度も聞いたことがなかった」
達也の目には、まだどこか半信半疑の光があった。

「聞いたことがなかっただって？ ボクは彼女が安心して心をひらける、交際相手ではなかったようですよ、と言い直せ。いいか、誘拐事件は凶悪犯罪のひとつだ。ひとつ対応を間違えば、殺されていた。一分一秒が恐怖の世界だぞ」

「わかります」

「あんたは解ってない。一般論だが、幼児誘拐した犯人の動機は、身代金か、猥褻か、恨みか、いずれか。この先が問題だ。女性ならば、愛するひとから、猥褻な誘拐だろうと疑われるのが怖い。愛するほどに、そういう事実がなくても、想像されるのが怖くて、話せないものだ」

「佐和子が話してくれていたなら、どんな目に遭ったとしても、ボクは受け入れた」

「そのことば自体がそもそもダメだ。もし彼女が性的な暴行を受けていたら、男性恐怖症から、恋人すら作れない。鳴野佐和子は恋人を作った、それだけで潔癖の身だ。そこまで言わない、と解らないのか」

井伊の目が、上面な男だとあなどっていた。

「……。彼女の生命にかかわる事態だ、とお話されていたけど……」

…
「気になるか。誘拐事件から21年経ったいまになって、その犯人が彼女をつけ回している節があるんだ。
最近、彼女は旧古河庭園で、何者かに階段から突き落とされて、大ケガをしている。
大腿骨を折っている。その犯人が誘拐犯と同一だ、という確証はまだないが、悪魔につけ狙われている、という彼女の勘は外れていない」

「知らなかった……」
ランナーにむかって、あと3周だ、と叫んだ。

「学生など放っておけ。好き勝手に走らせろ。彼女の命と、この場の学生のタイムと、どっちが大切なんだ」
「すみません」

「早いうちに凶悪犯を見つけ出し、罪を背負せる。それが池袋の裏稼業人が請け負ったしごとだ。表現を変えれば、彼女の心に翼をつけて、飛ばたいでもいい、恋をして、明るい詩を創作してもらおう。それがおれに対する報酬だ」

「心に翼……。ぼくは佐和子の心の苦しきまで、理解できていな



かった。彼女に詫びたい、心から」

「だったら、この電話で、いまずぐ一言かけてやりな。善は急げだ」

井伊はじぶんのケイタイを差し向けながら、

「話のついでに、裏稼業人の能力がなくて、あなたが殺されても、葬儀にはかならず出席します、とつけ加えてやるといい」

「そんな」

「冗談だ」

ケイタイがコールしている。表示された番号から察したのか、いい加減さんね、ごめんなさい、こちらからかけられなくて、と佐和子の弾んだ声が洩れてきた。

「ぼくだ。わかるか？」

達也のことばだとわかったのだろう、佐和子がとたんに無言になったようだ。ほんの数秒後には、彼女から電話を切った。

「あとは自分のケイタイでかけな」

井伊は、そのケイタイを奪い取った。そして、彼女のケイタイ番号を登録した。

「ボクにも、なにか協力させてください。佐和子の身を守るために」

「喜ばしい申し出だ」

井伊は綿密に策をさすけた。そして、短期決戦の勝負で、犯人を特定させる、と強調した。

井伊は彼女のケイタイ電話番号へのSMSで、メールを入れた。

折り返し、佐和子から連絡がきた。

井伊はすぐさま電話をかけた。

連絡が取れなかったのは、手帳に挟む、電話メモ帳の紛失だったという。井伊はある種の安堵を憶えた。

「なぜ、ケイタイに登録しておかなかった？」

「悪魔がもしケイタイを盗んだら、親しい人の個人情報までも筒抜けになります。それが怖くて」

「そろそろ悪魔を恐れてばかりいないで、悪魔退治に気持ちを切り替えたほうがいい。弱い気持ちだと、付け込まれる」

「いい加減さんは強いひとだから、いま登録します」

「これから会えないかな。新しい情報がある」
「わたしもお知らせしたいことがあります。でも、いま祖母といっしょに国立劇場の観劇をみに向かっているの……」

佐和子は逡巡していた。

「それなら、今晚は祖母孝行したほうがいい。きょうは佐和子さんが無事だった、と確認できただけでいい」

井伊はあえて強引に押さなかった。

翌朝には、旧古河庭園の正門で、鴨野佐和子と落ち合った。朝9時の開園直後だったので、心字池を巡る和風庭園には、人の姿はまばら。朝の陽光でかがやく池面は静かで、剪定された松や



灯籠が映しされていた。

「貴重な4日間の休みを、わたしのためにすみません。ご家族のかたに、申し訳なくて……」

ふたりは肩をならべて小さな橋を渡った。鴨があちらこちらで遊ぶ。心静かになれる、情感のある風景だった。

「ご家族といわれてもな。うちの娘は大学生だし、父親なんかもう相手にしない年だよ。妻とは別居生活ちゅう。こんな話をするために、八ヶ岳からとんぼ返りしたんじゃない。本題に入る前に、別の話がある」

「庭園の歴史ですか。入院ちゅうはいい加減さんから、戦国武将の裏話や、明治維新の秘話など、歴史の話をおもしろく聞かせてもらい、楽しかったわ」

「いや、歴史の話じゃない。でも、かんたん^{かんたん}に説明しておくか。ここは明治の元勳・陸奥宗光^{むつねみつ}の別宅だった。その後、古河家が譲りうけたものだ。やがて国が管理し、ときを経て東京都が整備し、1956（昭和31）年からは一般に公開された。見ての通り、山水が豊かな、都内でも最も秀逸な庭園のひとつだ」

「いい加減さんは歴史を語るとき、目の輝きがちがいますね」
「こんな話をはじめたら時間がいくらあっても、足りない。別の



話とは、店長として、いまだに気になることだ。大病院の脳神経外科からきいた話だと、事故から1カ月、3ヶ月後に、ちょっとした弾みから、頭蓋骨と皮膜の間に出血が起きるらしい。病状はどう？」

「だいじょうぶです。入院ちゅうも、お話したとおり、頭は打撲していません。わたしが床に横たわると、店員の方が手際よく毛布で全身をつつんでくれました」

「それはレジチーフだ。うちの店では、抜群はくぐんにできる女性だ。

ほかの者といえば……、ないものねだりになる、止めておこう」

「毛布に包まれた、わたしの頭が直に床に触れていました。それをみて、頭を打った、と思い込まれた人がいたんだと思います」

「まあ、お客は責任のないところで、声を大にして、さも自分は正しいと言いつ張るからな」

「ですから、ご心配なく。手足もこんなふうに、回復しました」

彼女はVサインを作った。表情はこれまでになく、明るいしぐさだった。

「誘拐事件の情報交換に入ろう」

「私からさきにお話します。21年まえに、ロープウェイ山頂駅にちかい『坪庭』で、5歳の少女が遭難した、という報道がありました」

彼女がショルダー・バックから、新聞のコピーを取りだした。



それは『毎朝長野』だった。

「この記事を書いた元ジャーナリストに会って、話がきけた。取材ノートも見せてもらった」

井伊は簡略に芦野守とのやり取りを説明した。

「さすが裏稼業人ですね。元新聞記者にまで会って話を聞きだされているとは……」

「この新聞記事には、大きな価値がある。それは誘拐事件の犯行日が21年前の3月15日だと特定できる、客観的証拠になるという点で」

「つまり、完全犯罪の容疑者のアリバイ崩しに、役立つわけですね」

「そのとおり。誘拐事件がなぜ遭難事故になってしまったのか。この点について、どう考える？」

「嶋野佐和子の脳裏の奥ふかくに眠る、事件にかんする記憶の一端でも引きだしたい、という気持ちから、井伊は訊いたのだ。

「警察や消防が『坪庭』の周辺の捜索をはじめたころには、わたしはもう山頂駅にいなかったと思います」

「なぜ？」

「山の遭難とは、山の中をあらこちらさ迷うわけですよ。誘拐された、わたしには迷ったり、雪のなかで、途方にくれたりした記憶はありません。犯人が、なにかうまいことをいって、ロープウェイで山麓駅まで連れて下りて、車で連れ去ったのだと思います」

彼女の目には真剣に推理をすすめる強さがあった。『毎朝長野』の記事が彼女の心に、憎い犯人に迫りたいという、つよい意思を与えたようだ。

「犯人は山頂駅で、どのような誘い方をした……?」

「さあ? ロープウェイで山頂駅まで行きながら、わたしは格好良く滑る父のスキーが見られなかった、という想いがつよく残っています。そこからの推理ですが、『パパは、いまロープウェイの真下を滑っているよ、見るならまだよ。ママは次のロープウェイでくるから』といわれ、わたしは母から切り離されたのだと思います」

「そのとおりの展開だったとしたならば、難問のひとつに結論がでる。……犯人は山頂駅で少女を誘拐してから、縞枯山、天狗岳などの主脈縦走で本沢ロッジに入った、という線が消える」

犯人はロープウェイ山麓駅の駐車場で、少女を車に乗せてから、松原湖に近い、稲子登山口に向かった。犯人はそこから登って本沢ロッジに連れ込んだ、という線が濃厚になる。

「少女の佐和子がなぜ犯人のいうまま、すなおに車に乗せられた



と思う?」

「わかりません。いまとなれば、犯人の言いなりに車に乗せられた、という口惜しさがあります」

彼女が唇をかみしめた。

「犯行の動機も考えてみたい。事件は偶発的なものか。あるいは狙いを定めた、計画的なものか。この点で、なにかしら記憶に残るものはないかな?」

「動機に結びつくものですね? 刃物で脅されたことがあまりにも強烈過ぎて……。他のことが記憶から薄れています」

それでも、彼女が過去の記憶の一コマでも思い起こすように、考え込んでいた。

「犯人から、父親の勤め先であった、大蔵省主計局について話がでなかったかな?」

井伊が誘い水をむけた。

「さあ? 犯人のことばとしては憶えていません。小、中学校のころのわたしは実父が大蔵省に勤務していること自体が、大嫌いでした。なので、祖父は重工に勤めていると、なんの抵抗もなく話せました。父の職業は他人にはなすことも、訊かれることも嫌でした。」

「それは誘拐事件からむ、トラウマじゃないかな」

「そうかもしれません。父がインドの日本大使館にファイナンサー・アタッシェとして出向したときです。これで実親の職業は外務省だと話せると、ひどく安堵した憶えがあります」

「軟禁された本沢ロッジと、大蔵省ぎりぎり。ここになにか結びつくものはないかな」

井伊は彼女の顔をのぞき見た。

「子どものころ、父が大蔵省に勤務していると知った友だちからお金持ちね、とよくいわれました。国庫には膨大なお金がありますが、祖父母の暮らしぶりとはまったく無関係なのに……」

「国庫の金を当て込んだ、そんな間の抜けた、誘拐事件とは思えない」

「父が大蔵省に勤めていなければ、こんな怖い目に遭わなかったのに、という気持ちのなかにありました」

「それだな。誘拐犯の犯行動機は、大蔵省にたいする敵意か、憎しみかもしれない」

蓼科スキー場で、大蔵省のキャリア家族がスキーを楽しんでいる。犯人は遠目にじつとそれをみていた。嫉^{ねた}みか、嫌がらせかで、犯人は山頂駅で、少女を親から切り離し、迷子にさせてやろうと思った。事件の発端は、偶発的な、軽いできごとだったはずだ。一言、二言、少女を誘ってみたなら、難なくついてきた。駐車場でも、かんとんに車に乗ってきた。



「いい加減さんの推理は、あながち外れていないと思います。車に簡単に乗ったわたしとしては、口惜しいですけど」

「少女が親しげに犯人についていったら、誘拐だと気づくものはない。誘拐だと見抜いて名乗って語れる、目撃者がいなかった。そのうえ、少女が抵抗して残したような靴とか、マフラーとか、持ち物とか、遺留品^{いりりゅうひん}が誘拐現場にはひとつもなかった。犯罪の痕跡がまったく残らなかったことが、遭難事故となり、完全犯罪に結びついたのだろう」

散策の小路をいくと、その先がやや小高い西洋庭園だった。シーズンになれば、この庭園には約90種、180株のバラが咲く。いまは職員が地味に手入れをしていた。

「犯人はスキーヤー、登山者、どちらかしら？」

「いや、それはまだ絞り込めないな。山頂駅には樹氷や雪景色の観光客もそれなりに多くいることだし」

犯人の絞込みは、山頂駅からはむずかしい。むしろ、本沢ロッジから追跡したほうがよいだろう。

3月の本沢温泉は深い雪だ。氷点下の酷寒の世界だから、露天風呂には入れない。人気のない雪山ルートだ。雪解けになれば、掌を返したように、大勢の登山者やハイカーがやってくる。



「犯行日の21年前の3月15日から2週間を考えると、本沢ロッジは雪に埋まっている。登山者はかなりかぎられている」

「そのうちの一人が犯人ですか」

「可能性は高い。それだけでは断定できないけれど」

「疑問があります。わたしは2週間も山小屋に閉じ込められていました。ほかの登山者が気づかないなんて、ふしぎです」

「山小屋は、夏山シーズンのピークには200人から宿泊する。部屋数は多いし、別棟を持っている。真冬は非難小屋として解放しているが、せいぜい1、2部屋しか使用させない。ほかの部屋は釘で扉を打ちつけてクローズしている。だから、奥の部屋に強引に連れ込んでしまえば、完璧な軟禁場所になる」

「冬の登山者にしかわからない、事件の盲点ですね」

「ひとつ奇妙な数字がある。本沢ロッジの標高は2240メートル。ヒラタス蓼科ロープウェイ山頂駅とまったく同じ。標高が同じだから、積雪量もほぼ同じ、と考えてもさしつかえない」

井伊が山頂駅の近くで撮ってきた写真をみせた。

「こんな深い雪山ですか、この雪を見ただけで、大人のわたしでも、山小屋から逃げる気にはなれません。実際、雪山を歩いたという記憶はありませんし……」

彼女はなおも写真を見つめていた。

「小屋での、犯人とのやり取りは、どんな記憶がある？」

「部屋の窓から、断崖絶壁の怖い山がいつも見えていました。この部屋から一歩でもでたら、あの断崖の上に連れて行って、この

肉切り包丁で刺して、突き落としてやるからな。建物のなかをふらふら歩くのもだめだ。トイレ以外の場所はゼツタイいくな。それを破ったら、この包丁で胸を刺すぞ」と脅されました。夜がとても怖くて泣いていました」

「ひどい奴だ。話を進めよう。犯人と接点ができるのが、身柄解放のときだ。この点について、なにか情報はないかな？」

「解放された少女の情報がなぜ表に出なかったのかしら、という疑問があります。ふつうならば、新聞に大きく派手に、『5歳の少女が2週間後に生存で発見』という記事が載るはずです。それが一行もないなんて、考えられませんか」

佐和子は国会図書館で、21年前の3月から同月、翌月、半年後、さらに一年と新聞を丹念に調べてみたという。それに関して一行も見当たらなかったとおしえた。

「佐和子さんの親と犯人との間で、取引があったと思われる」

「わたしも、そう思います。真相が知りたいので、インドまで母に会いにいきます。父よりも、母のほうが真実を話してくれそうですから、きつと」



きのう都庁にいった、パスポートの申請をしてきました、と彼女はつけ加えた。

「お父さんは、アメリカの大学教授じゃなかった？ この前、両親はともにそっちに住んでいると聞いたけれど？」

「そうですが、母は先月末から、インドの寺院でステイしています。手紙がきましたから、新しい詩を作りました」

彼女がバックから新規の創作ノートを取り出した。『カルメル会修道女の部屋』です、とタイトルをおしえてから、読んで聞かせた。

回廊のアーチ型の窓から

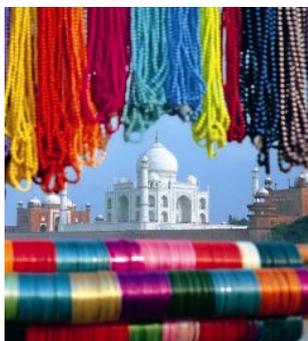
朝日がこぼれはいつて

寒さに震えるからだがすこしなごむ

中庭の木蓮にふっくりと花ひらく

はなやかな白い輝き

「ずいぶん、明るい詩だ。木蓮の情景がいいな」
「わたしの心はだんだん、いい加減さんの明るい性格に染まってきます」



彼女が微笑んだ。

「それは悲しむべきことだ。このさき時間にルーズで、やることをすくことにはいい加減で、繊細さがなくなる。佐和子さんの良さが消えていく」

「そういう性格になれたら、最高でしょうね」

「悪魔の話にもどうろ。佐和子さんはさきの新宿の大病院で、こういうった。『悪魔は一度顔を出すと、私を殺そうと、何日もつきまといます。長いときは1ヶ月も、2ヶ月も。耳の奥には、殺すぞ、という声がひびくのです。幻聴げんちやうでも、錯覚さつかくでもありません。ほんとうに怖いできごとが起こるんです』といった。単なる勘でなく、現実としてとらえるべきだろう。それはいつごろから感じていた？」

「一昨年ぐらいまえからです。なんとなく誰かにじっと見られている、そんな気色のわるさや、得体の知れないものを感じていました。ある日、雑踏のなかで、すれ違いざま、『殺すぞ』という声が聞こえたのです。この声は悪魔だ、とぴんとききました。振り返りましたら、それが誰だかわからなかったのです。それは昨年のことです」

完全犯罪に安住してきた犯人が、一昨年から動きはじめた。鴨野佐和子は日常生活のなかで、悪魔に狙われている。これはもうまちがいない。

「なぜ、犯人はここにきて動きはじめたのかしら」
彼女が首を傾げた。

「犯人の頭から、誘拐事件は決して消えない。これはまったくの推測だが、メディアに『鳴野大使』という名が出たとき、この大使の娘を誘拐したのだ、と罪の大きさを知ったと思う。他方で、いつかバレるのではないか、という不安は時効を過ぎても、消えるものではない。一昨年、ひよんな拍子から、20代の鳴野佐和子さんに出会った……」

「どこで、接点があったのかしら？」

「いまの段階では、犯人しかわからない。……少女は5歳にして利口な子だった。こちらの顔を覚えていて、『この男よ、わたしを肉きり包丁で脅して、本沢ロジに2週間も閉じ込めたのは』と目のまえで叫ぶかも知れない。地位とか、名誉があるほどに、発覚への強い警戒心をもつ」

「わたし犯人の顔はおぼえていません」

「犯人は、そうは思わない。鳴野佐和子が生きているかぎり、過去の犯罪の暴露がありえる、と怖れる。21年前の完全犯罪の優越感^カは醒め、不安と焦燥^{しょうそう}に駆り立てられる」

犯人はそこで鳴野佐和子の口ふさぎを考えはじめる。……刃物で鳴野佐和子を刺せば、証拠が残り、殺人罪で捕まる。『完全犯罪ができる人間だ』という自負心は棄てきれない。考えあぐねた末に、あえて殺さなくてもよい、鳴野佐和子を階段から突き落としたりして、脳挫傷などで記憶喪失にさせればよいのだ、という結論に導かれていく。目的は少女時代の記憶の消去だから。

井伊は犯罪者の心理に立ってから、さらにこう聞かせた。

「犯人は悪魔の牙^{きば}を見せはじめた。この庭園の階段のうえで、佐和子さんが詩の創作をしているとき、足音を消して、忍び寄せた」

「悪魔かな、とわたしが思った瞬間、ふり向くまもなく、突き落とされました。頭を打たず、骨折でした。不幸ちゅうの幸いだっただのかしら」

「こんごも、類似した犯行が連続する可能性が高い。脅すわけじゃないが、エスカレートしていくだろう」

「外出するのが怖くなります」

「自由に外出できるように、手は打っている」

「どんな手ですか」

「そのまえに、ひとつ聞きたい。与謝野という名まえに聞きおぼえはないかな」

「与謝野さんですか。います。小学校5年のときの担任です。やさしくて、いい先生です」

彼女の顔がぱつと明るくなった。

「小学校の担任……」

「高校2年のときです。この近く染井吉野の発祥の地『染井』で、藍染の体験をしているときでした。与謝野先生とばったり

お会いしました。それからお手紙とか、年賀状とかを交わしてい



ます。最近ではメールで、詩を送らせてもらい、先生のほうから感想とか、アドバイスもいただいています」

「最近はいつ、どこで会った？」

「与謝野先生のご自宅は染井です。去年の5月、バラが満開のときに、園内を案内してくださいました。わたしは、この庭園が気に入り、それからは詩の創作で、一人でも来るようになりまして」

「バラや詩のほかにどんな話がでた？」

「ご主人は財務省勤務だそうです。転勤が多く、単身赴任で、夫はかわいそう、とお話されていました。むかし、わたしの母も、大蔵省は転勤ばかりでいやになる、と話していましたから、よくわかります」

「与謝野先生は女性か」

井伊は失望した。

「なにか？」

「いや、池袋中央小学校に、与謝野副校長がいて、八ヶ岳に若い頃に登っていたというから、『鳴野』という漢字の話題をもちだしてみた。すると、『鳴野佐和子』と反応したから、誘拐事件に



からむ、怪しい人物かな、と疑ってみた」

「ほかに、与謝野先生がいたのかもしれませんが。わたし小学校は3回も転校していますから。全部の先生は憶えていません」

祖父は大手重工を退職するとき、役員でした、その間には、本支店間の転勤があったという。

「東京都の小学校だ」

「小学校低学年の、担任以外の先生までは？ ただ、どの学校でも、鳴野はめずらしいな、『鳴』って、どういう意味だと聞く先生がいました。鳴野が読めなくて、佐和子、と呼ぶ先生もいました。その副校長先生は、鳴野佐和子と、フルネームでおぼえていられたのかと思います」

「与謝野とは、どのていどある苗字なのかな？」

「わたしは、新宿の大病院に入院していた、口の達者なスキーヤーのように、雪の八ヶ岳を知りつくした、山岳関係者が犯人かな、と思っています」

「その冒険スキーヤーとは、あしたは、本沢ロッジ、硫黄岳で会う。きょうはこれからペンションで奥さんと会うつもりだ」

「長野在住のスキーヤーでも、スキーの道具や山の道具を買いに東京にもきますよね。わたしのすむマンションを知っているのかしら？」

「容疑者を絞り込むにはまだ材料不足だ。この庭園にいる者、だれが犯人だっておかしくない。予断を許さない。そこで佐和子さんの身边は芝浦達也くんを守ってもらうように、話をつけてき

た」

「えっ、達也さんは大学陸上部の指導コーチで、忙しいはずですよ。それに交際を止めたひとですから」

彼女の顔にはおどろきと戸惑いがあった。

「嫌なのか？ 芝浦くんがそばにいます」と

「いい加減さんは強引過ぎます」

彼女の顔には、心の乱れが浮かんでいた。

「悪魔は肉きり包」で、少女を脅した、凶暴性のある男だ。ガードが必要だ。おれはこれから八ヶ岳だ。ひとり二役はできない」

井伊は簡略に、芝浦達也にたのんだ経緯を説明した。

「わたしの了解もなく、いい加減さんは強引過ぎます」

「別れた男と、会うのが気まずい？」

「当然です。いい加減さんはデリカシーがありません」

「センチメンタルな気持ちは危険だ。これは生死にからむ、戦いなんだ」

「もう別れたひとです。きのう

ケイタイに電話が何度もかか

ってきましたが、わたしは出ま

せんでした」

「いいか。一度犯罪に手を染め

た人間は、再犯が多く、犯行を

押し止める、という理性が薄くなる」

かれは犯人の立場からこう説明した。……、鳴野佐和子の身辺



には、このごろ得体の知れない、裏稼業人がついてくる。八ヶ岳周辺も嗅ぎまわっている。こうなれば、はやく鳴野佐和子の口を塞ぎがないと、過去の自分の恥部が表に出しまう。それが殺意に変わらない、という保障はない。

「犯人は、もう殺る、という決断になっているかもしれない。無防備とはいかないのだ。ひとつ間違えれば、佐和子さんはおぞましい事件に巻き込まれる」

「それなら警察に頼みます」

「はたして、警察は24時間、ボディガードをつけて守ってくれるかな？ 21年まえの事件が警察で、誘拐事件だと断定していればまだしも、山岳遭難事故だ。警察は真剣には乗らないよ」

「わかりました。わたしは池袋の裏稼業人に、身の安全を頼みました。ここはいい加減さんの指示に従います」

彼女の目から反発が消えた。

「犯人を一刻でも早く特定しないと、さらなる危機に陥る。誘拐事件から21年が経つ。犯人はもう40代後半か、それ以上の年だ。これらの事情は、すべて芝浦くんに話して聞かせている。ボディガードとして寄り添うのでなく、遠く近くから犯人の出方を待つ。怪しげな人物が佐和子さんに接近してきたら、まずデジカメで撮影する」

井伊は物証が必要だと思いつけ加えた。

「おとり捜査ね」

彼女の目が複雑に光っていた。

「そういう面もある。悪魔らしき人物が現れたら、芝浦君はデジ
カメラで撮影し、犯人との間に割り込
む。あるいは体当たりして捕まえる。
芝浦君は足が速い、俊敏な行動が期
待できる」

「いつからですか」

「ほら、あの建物の影から、芝浦く
んがすで見守っている」

井伊が建物の角を指した。

「えっ」

佐和子が再会した達也をじっと見つめていた。



写真モデル・森川詩子さん

詩集「受容」(有本多企画・小林陽子さん(詩人)

写真提供(ロープウェイ関連) (株)ピラタス蓼科ロープウェイ

地図(八ヶ岳)の作図・蒲池潤さん

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】